

# 草庵仏教

第233号  
(発行日)

2009年11月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会 --- 毎月6日。

午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

# 用いて尽きざる一句

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏は「もろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり」といわれている。南無阿弥陀仏は衆生を涅槃(さとり)に至らしめたもう大いなる行であるが、その行に属する性質には、あらゆる善をそなえ、あらゆる功德(幸い)のもとがあると、仰せられる。

善と功德(幸い)はだれしも願うものである。そのために私たちはいろいろな格言や座右の銘にヒントを得、それを参考にする。たしかにいろいろな格言や座右の銘や「善いお話」は、それぞれに光となり、教訓となるのであろう。日めくりカレンダーに記されている格言のたぐいもなにかの役に立っているようである。

しかし、それらを記憶して生活のいろいろな場面で思い出し、自らに言い聞かせるの

は、相当に困難であるし、また煩い多きものである。たとえば「相手に腹が立った時には、自分も悪くなかったかと反省してみよ」という教訓を知っていると、腹が立ってむしろくしゃやしている最中に、この教訓を思い出して、自分に引き当てることはそう容易なことではない。

またそういう腹が立った時に対処するような格言は、自分がうぬぼれていい気になっている時に、自分のうぬぼれを反省せしむる教訓にはならなくて、「猿も木から落ちる」などの別の言葉を探さねばならない。

あるいは病気になる時、「自分が病気になる」と、人が病気になるている辛さを理解できるように「病気が謙虚になれ」とか、「病気が無駄ではない」とか、「病気が知れるものだ」といった教訓を刻みつ

けることもあるが、そういう言葉は病気には対応できても、人から非難悪口された時には効果が無い。人から非難悪口されたときは、「人が私の悪口を言ってくれるのは自分を知ることができるのはい薬だ」とか「悪口を言ってくれるお陰で、自分が鍛えられる」などの格言を用意せねばならない。

身を感じる人が多い。

このような私たちに、釈尊が観無量寿経の最後に「汝よくこの語をたもて。この語をたもてというは、すなわちこれ無量寿仏の名をたもてとあり」と仰せくださって、私たちにさまざま教訓を身に付けよともおっしゃらず、ただ無量寿仏の御名すなわち南無阿弥陀仏をたもてとお勧めくださっている。「汝、南無阿弥陀仏の言葉をたもて行け」と。いわばお念仏の一句を用い、ただお念仏を申して行けと仰せくださるのである。

実際、その都度の処方箋のような格言類はためになる善き言葉であっても、なかなか身に付くものではない、というのが現実ではなからうか。要するにこうしたさまざま教訓的な言葉は、私にとってはお借り物でしかなく、かえってそれにそむいている我が

お念仏はだれでもいつでもたもつことができる易しい行であり、しかもこの行一つをたもつだけでよいと仰せくださるのである。まことに私たちにふさわしい行ではないか。

## 《 念 佛 寺 報 恩 講 》

十二月二十二日 (火) 午後二時始まり

講師 大阪・浄永寺住職 矢幡 和 男師

この南無阿弥陀仏は、それぞれの人に応じての救いであるとともに、人におけるそれぞれの時と場所に応じて道をつけたもう功德がある。

腹が立ったらナムアミダブツである。いい気になっていたら、ナムアミダブツである。人から非難悪口されて、イヤな思いがすれば、そのままナムアミダブツである。人の行いが気にさわったらナムアミダブツである。言い過ぎたなあと心が痛んだらナムアミダブツである。病気になって辛い時アミダブツ、死ぬのではなからうかと心配になったらナムアミダブツである。

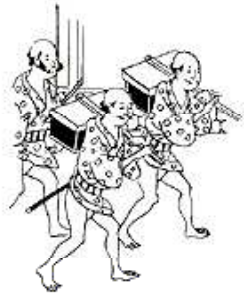
そうすると苦しいまま、やりきれないまま、「ここにいるよ、苦しいであろう悲しいであろうが、私がついている」と阿弥陀様がナムアミダブツとなつて出てくださる。死ぬんじゃないからうかという不安のところはナムアミダブツと出てくださって「汝を浄土へ連れて行く、心配しなくてよい」と安慰したもう。親が死に、夫が死んで、さびしい時もナムアミダブツである。南無阿弥陀仏は、「私はいつもあなたとともにいる」と仰せくださる。また人助けがで

ない自分が情けないなあと思ふ時、ナムアミダブツと出てくださって、「汝を他の者を助ける仏に必ずしてみせる」と仰せくださる。

有難い時もナムアミダブツ、なんともない時もナムアミダブツ、むしゃくしゃする時もナムアミダブツ、心が晴れている時もナムアミダブツ、心がうつつとうしい時はなおナムアミダブツ、感謝もナムアミダブツ、懺悔もナムアミダブツ。ナムアミダブツに帰するばかりである。

こうして南無阿弥陀仏は「もろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せ」るがゆに、終生用いても尽くすことのできない一句である。南無阿弥陀仏の一句で人生生活の全体が安定し、それによってあらゆる出来事に意味が与えられるのである。南無阿弥陀仏は、私全体の居り場になつてくださるのである。

(了)



扶箱 1  
(C)SHOGAKUKAN INC.

# 正信偈に学ぶ問答

## (二十一)

普放無量無辺光

無碍無对光炎王

清浄歓喜智慧光

不断難思無称光

超日月光照塵刹

一切群生蒙光照

書き下し(普く無量・無辺光・無碍・無对・光炎王・清浄・歓喜・智慧光・不断・難思・無称光・超日月光を放ちて塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る)

現代語訳(本願を成就された仏は、無量光・無辺光・無碍光・無对光・炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光とたたえられる光明を放つて、広くすべての国々を照らし、すべての衆生はその光明に照らされる)

G 「次に超日月光照塵刹のところは、無量光以下、超日月光までの十二光が塵刹を照

らすと仰せられているのですね」

D 「ええそうです」

G 「では、超日月光というのは阿弥陀仏のどういうお徳ですか」

D 「阿弥陀仏の光明は、日月の光に超え勝れている、と讃歎されているのです」

G 「どういふ点で超え勝れているのでしょうか」

D 「それについて、昔から言われていることは、日月の光は物の表面を照らすことではできても、物の裏を照らすことができない。しかし、阿弥陀仏の光は目には見えないう物の裏ともいふべき私たちの心の中まで照らしてくださる、と」

G 「太陽の光は心までは照らさない。けれども仏の光は太陽の光が照らすことのできないう内なる私たちの心を照らしてくださるのですね」

D 「ただここで言おうとされるのは、太陽などの光と仏の

光明との優劣をおっしゃるといふよりは、領域が違うことを言おうとされているように思います。超日月光の超といふ文字がそれを表しているといえましよう。超えているといふことは、太陽や月の光とは質の違う、領域の違う、しかも非常に重要な光であることを超という字で表されていると思います」

G 「太陽などの光が働く領域と仏の光が働く領域とは違うのですね。ではどういふ違いがあるのでしょうか」

D 「太陽や電灯の光は物質的・物理的な光であり、物質の領域(物理的空間)を照らしませす。それに対して阿弥陀仏の光明は心の光であり、心の領域を照らしてくださる」

G 「物質的な領域と心的な領域を分けるのですね」

D 「ええ、そのように分けて理解してみると分かりやすいですね」

G 「その上で、阿弥陀仏の光は心の光なのです」

D 「ええそうです。阿弥陀仏の救済は撰取不捨の働きといわれませんが、それについて聖人はこの《正信偈》でも

撰取の心光は常に照護したもう

とか、《一念多念文意》には**無碍光**のひかりの御ころにおさめとりたまう

とか、《尊号真像銘文》には**仏心**のひかりあきらかに**信心**の人のいただきをつねにてらしたまう

など、阿弥陀仏の光明の徳を心光として処々にお示しくださっています

**G** 「阿弥陀仏の働きは心の光、心の働きのすね。超日月**光照**塵刹の次は一切**群生**蒙**光照**ですが、そうすると一切の群生は**光照**を蒙るといわれる**光照**の光は阿弥陀仏の心光と

ません」  
**G** 「そうすると、よく世間で（神も仏もあるものか、どこにも見えないではないか）というの、領域の違いが分からないから、そういう疑問や批判が出てくるのですね」  
**D** 「そうなんです、だいたいそう批判しているその人の心そのものがすで見えないのですね。心こそその人の主体ですから、自分自身も見えないということですよ。見えないけどその人の心が無いとはいえません」  
**G** 「人の心も見えないのだから、心の働きである仏様が見えないのは当然だといえますね」

**D** 「ええそう聞かせていただいています。阿弥陀仏の光明は一切の生きとし生けるものの心を照らし続けていたもう

仏心の光であるということですね。仏心が凡心に働きかけてくださる」

**G** 「阿弥陀仏の働きは心であれば、私たちの目には見えな

いし手でふれることもできませんね」  
**D** 「ええそうです。見えないのは阿弥陀仏の心だけではありません。そういつているあなたや私の心も目に見えませんし、手でふれることもでき

仏もない）などという批判すらできないばかりか、世界があることも分からない。太陽や月や山や花などの大自然やあなたや私が存在することなど、一切の存在が認識できま

せん。ですから、心がなければ世界もないといっていると思います。へたとえ心がなくてもこの宇宙や大自然はあるのではないですか」という反論すら、人に心があつて初めていえることであつて、もし誰にも心が無く、認識する能力がなければ、外に世界があると

なくなるとかすらすら全くいなくなりますが」  
**G** 「次ぎに（塵刹を照らす）というの」

**D** 「塵はちり、刹は国で、塵のような無数の国を常に照らしてくださる。それは次の一切**群生**蒙**光照**と同じ意味で、あらゆる国、あらゆる境界に

ある一切の生きとし生けるものの心を常に照らし続けてくださっている、それが阿弥陀仏の光明であるといわれるの

も阿弥陀仏の働きを受け続けてきたし、今も阿弥陀仏の光明に照らされている。皆、広大な尊い光（十二光）の中にいる。一切衆生、仏の心の中

にいます。ただそれを知らないだけです。自分の無知の闇（無明）によって閉ざされているのです」

**G** 「どのような衆生も十二の仏心の光を受けているのです

ね。そうすると仏教徒だけでなく、キリスト教徒もヒンズー教徒もまた無信仰な人も、日本人もアメリカ人もトルコ人も、犯罪を犯した人も犯さ

ない人も、あるいはこの世の人たちだけでなく、餓鬼の衆生も地獄の衆生も、みな十二の光を受けているのです

ね」  
**D** 「ええ、そう聞きしています。ですからたとえば、どんな極悪な犯罪を犯してしま

った人も、阿弥陀仏は照らしておられると思います」  
**G** 「照らすということはどういうことでしょうか」

**D** 「一言でいえば、真実であうようにとその心を育てて

す」という意味の中身ではないでしょうか」

**G** 「照らされると目覚めが起こってくるのですね」

**D** 「ええ、闇の中にある自分も世界もまったく知れません。そのように心が無明の闇

だけだと、自分の心の姿も、また何を願ったらいいかも分かりません」

**G** 「それが光に照らされるとどうなるのですか」

**D** 「仏の光に照らされ続けている内に、育てられていき、やつと自分の心の有様、煩惱

や罪の深さに気がついてきて、真実を求めようと願うようになりません」

**G** 「そうすると死刑判決を受けたような人も、仏の光を受けつつあるわけですから、人

としてのいのちを途中で断つてしまうことは問題です」  
**D** 「ええ、（この者は全く改善の見込みがない」と判決で

出されませんが、そういう断定は仏のお育ての光を認めないのと同じです」  
**G** 「この教えによって、世界中の人、どんな人も仏心の働きを受けつつある人である、

# 信心夜話

ゴチツクの字が松並さんの言葉。

\*

○東漸寺様「略典の初めに「万行円備の嘉号は障りを消し疑を除く」とある。これをどう頂きなされるか」と。

人々は聞きながら、念仏もせず、疑い晴れよう疑い晴れようとしても、疑の晴れる薬を飲まないから、何時までたっても「疑晴れぬ」。

（お名号はわれらの疑いを晴らしてくださる徳があるとの聖人の仰せ（略典）。これは本当に有難いお徳である。人と仏の間をへだてているのは疑い心である。迷いの心は本願を疑う心となつてはたらいっている。南無阿弥陀仏はこの疑い心を除く徳用があるとのこと。一方、阿弥陀仏は衆生に信心を成就したいと願われ、その願いは名号となつて、私たちの上に与えられる。信じてから称えるのではない。信心のある者もない者も誰でも、まず行じることができなのが易行といわれるお念仏である。誰にも行じられる名号を与えてくださる。まずは頂きやすいお念仏を頂いて称える。ここに称え現れてくださる南無阿弥陀仏は大悲の願心の結

のお念仏の思し召しを聞く。この名号は一体誰のために、何のためにできたものかをよくよく

聞かせていただく。そこに名号の大悲が私を照らし、我が身の助からなさとしてそれを助けずはおかないという大悲の願心を知らせてくださる。名号にこもる広大な願心はついに私の疑い心を破つて、我が心に徹したもう。大悲の結晶であるお念仏がなければ、如来大悲は伝わりにくい。大悲、届いて信心になつてくださるのだから。私たちの疑いの深さをすでに十分に知り抜いて、そんな私たちの疑いを除こうとして南無阿弥陀仏にまでなられて私に届けられている。そんな名号を称えないで、疑いを晴らそうとするから、いつまでたっても疑いが晴れない）

\*

○悪いやつじやと、思わしてもらう事がざんげと思つているが、念仏聞くまがざんげである。悪いやつと思つたから悪いやつであったのでもない。思ふも思わざるも元々悪いやつである。こんな者のざんげは何になる。人々は念仏以外にざんげもあり、歓喜もある様に思つている。ざんげしたすぐ後からまた怒つている。

（ざんげの元も、歓喜の元も南無阿弥陀仏の中にある。まことのざんげとは阿弥陀仏のご恩を知らず、阿弥陀仏のご恩を無視してきたことへのざんげである。南無阿弥陀仏のご恩が届いて、われらのざんげになる。だから、ざんげの元は南無阿弥陀仏である。それを離れた日常のざんげはその場かぎりのもの、かりそめのもの。そんなざんげはまたもとに戻つて、（ワシは悪くない）とすぐ高上がりしてしまう。私が自分を悪い奴と思おうと思うまいと、そんな私の思いに関係なく、性悪の者が私。私は自分の思いにかかわらず、すでに性悪の者と仏に知り抜かれていく。それを助ける南無阿弥陀仏になつてくださっている。（南無阿弥陀仏がこんな私のためでございましたか。それを知らずに今までどれほどご心配かけましたことか）と聞かせていただいているままがざんげになつている。（反省してきたそんな者を）のお念仏を聞いているままがざんげしたことにしてくださっている。それを離れて、（私は悪い奴だ）と思つても、それは日常的な道徳的反省でのざんげであつて、反省を離れるとすぐ元の（私もまんざらでない）に戻る。仏法にたいする邪見憍慢はそのままである）

○常に聞くとは 常に称うること

\*

（聞くといつても具体的には称えてい

る念仏の声を聞くのであり、称えらる。法を聞くといつても、称える念仏を聞くのであるから、聞くことと称えることは一つである。ただし、真宗の念仏は称える方に力が入つていのではない。中心は、御名を聞いている、聞こえているほかにはないのである。ただ、聞く、聞くといつて、念仏を称えることを離れた（聞く）は、聞かされる対象である南無阿弥陀仏と離れてしまう。だから、しばしば南無阿弥陀仏の法にそれてしまう）

（了）

## 《住職雑感》

信を得た人は、信を得たことを誇り、信を未だ得ない人や信の無い人を下に見てしまう傾きに陥りやすい。それに対して曾我量深先生は「已得生者と未得生者と区別するということはありません。已得生者であるということ誇らずに、未得生者と同じところに坐つて、未得生者と手をつないで行く。それが即ち御同朋、御同行ということでしょう。一歩さがつていつも願生者となる」と仰せ下さつていられる。宗祖聖人は、人の信不信に限らず、我・人とも

## 《真宗本廟（本山）報恩講》

十一月二十一日初速夜から十一月二十八日御満座まで

\*詳しくは寺までお電話ください。

に浄土を願う人、願って生きる人とい  
う立場に立たれた。まことに心すべき  
ことと教えられる。